

氏 名：萩田小夏

所 属：理学部生物学科 1 年

派遣大学：ラトビア大学

派遣期間：2015 年 9 月 3 日～9 月 15 日(13 日間)

日本語教室・指導内容

平日の 14:30-16:00、16:30-18:00 にラトビア大学にて日本語を教えました。

授業には、大学生だけでなく高校生や社会人も参加しており、毎回同じ顔ぶれとは限りません。

レベルも様々で、まだひらがなを学んでいる方もいれば、上手に会話できる方もいました。

私は日本の文化を紹介する予定でパワーポイントの資料を作っていたのですが、生徒のみなさんは文化よりも純粋に日本語が学びたいという気持ちが強く、資料は使えませんでした。

そのため、その日来た人のレベルに合わせて授業を考えていましたが、最初はそれぞれのレベルが分からず、難しすぎたり、易しすぎたりしてしまいました。

また、ラトビアの方は 3 か国語以上話せることが多く、英語での授業にまったく支障はないのですが、支障があるのは私のほうで、辞書とにらめっこしながら説明しても、文法や発音に問題があり上手く伝わらないことや、英語で質問されても語彙が分からず理解できないといったことが多々ありました。

なので、初級コースでは「色や天気の名詞」や「道の尋ね方・乗り換え」などについてホワイトボードに絵を描いたり、写真を用いたりして説明しました。

ある程度日本語がわかる上級コースの方との授業では、主に日本語を使いながら尊敬語・謙譲語・丁寧語など「敬語」についての授業も行いました。

上級コースの生徒さんのなかには「漢字」に強く興味をもっている方もおり、漢字の音読み・訓読みや熟語についての授業を行いました。「漢字検定」についての話をしたところ、やってみたいとのことだったので、後半は漢字検定のホームページから資料を印刷し、それをもとに授業を進めました。

方針が決まった後は比較的安定しましたが、自分が納得できる授業はできませんでした。

もっと興味を持ってもらえ、分かりやすくすることが今後の課題です。

日本語教室以外での交流活動

18:00 終了の授業後、一部の生徒さんと夕食を食べに行くことがよくありました。

(生徒さんの家におじゃまして伝統的なウクライナ料理をいただく機会もありました。)

この時は授業ではないので、少し気楽に話ができます。

リーガ市内にあるお寿司屋さんに行ったときには、正しい割りばしの割り方の話をしました。

漢字に興味がある方は科学者だったので「酢酸」や「塩化銀」などを出題し、「じゃあこれは？」と構造的で質問してもらって遊びをしました。化学式は世界共通であることが実感できて面白かったです。

また、私は鳥が好きであること、行ってみたい鳥類観測所があるがそこに行く手段がないことを話すと、「もしかしたら連れて行けるかもしれない」とのことで、後日本当に連れて行ってくださいました。

片道 車で 4 時間、270km も離れたところだったのですが、感謝してもしきれません。

交流は生徒さんのみにとどまりません。日本を出国してからは常に国際交流のチャンスがあります。まず、イスタンブール。私はイスタンブールで飛行機の乗り換えに失敗し、空港の椅子で二泊しました。そのため、チケットの買いなおしに奔走することになったのですが、パニックになった私を助けてくださった方がいました。国際電話をどこでかければよいか助言して下さった方もいました。無事にチケットを買った後、悔しいので地下鉄でイスタンブール市内に行った時も、陽気なオーストラリアの方と飛行機を逃した話をして笑いあいました。ラトビアに着いてからも、知らない人に道を聞いたり、市場の人と値段交渉したり、バスに乗っていたら降りる駅を教えてもらえたり……まだまだありますが、とにかくたくさんの人とふれあいました。言葉が通じないことも少なくありませんでしたが、それは問題ではないのだということがよくわかりました。

感想

派遣中のひとり行動は厳禁、と言われていましたが、私は授業のない午前中や休日はほとんどひとりで行動していました。海外ではどうしても日本人というのは集まりがちで、つい日本人ばかりで話してしまいます。それはとても安心感があるのですが、私はせっかく海外にいるのにもったいないと思うのです。私たちの滞在していた寮の周辺は、歴史的な背景もあり、治安が良いといわれるリーガの中では珍しい、危ない地区です。たしかに、夜、二人で歩いているときに後をつけられたりもしましたし、他の人はトロリーバスの中で財布を盗られました。そんな場所なのですが、昼間に歩いてみると印象が変わります。話に聞けば「怖い」場所でも、親子が散歩していたり、子供があそんでいた、あいさつされたり。少し危なそうな場所はありましたが、人々は普通に生活しています。せっかくそこにいるのだから、聞いた話だけでなく、自分の目で見て考えたいと思いました。ひとりで動くことは自己責任ということで、日本語は使えない、道に迷ってもスマートフォンは持っていない、犯罪に遭う危険も高いということですが、だからこそ、一生懸命英語を使ったり、周りに目を配ったり、自分でどうにかしようと努力できました。

派遣を終えて思うのは、世界は広いのだなあということです。

派遣中、日本では見られない様々なものを見ました。飛行機の中から、何十分も変わらない草原と川、山と谷の風景。センターピボットの畑。点々とかたまる小さな村。イスタンブールの空港では、様々な宗教のメッカ巡礼に行く人々。ラトビアでは、石畳の街並み、量り売りの肉・野菜、ノンホモ牛乳。

挙げるときりがありませんが、特に私は生き物の違いに感動しました。

空港に降り立って、真っ先に「ああ、海外だ」と実感したのはスズメとカラスの違いでした。

スズメはイエスズメ。カラスはハシボソガラス(*Corvus corone*)という日本にもいる種類なのですが、こちらは亜種のため白黒です。「カラスは黒い」という日本の常識は通じません。

他にもカケスの顔が黒くなかったり、ハクセキレイに過眼線がなかったり、日本では見られないアオガラを見たり、緯度が高いため苔や地衣類が多かったり……興味深いことがたくさんありました。

そういった違いに気づけても、まだまだ知識が足りず、思考が広げられなかったことを悔しく思います。ですが、海外に行ったからこそ見られたもの、体験できたことは多く、今後の学ぶ意欲につながることは間違いありません。派遣中にお世話になった様々な人に心から感謝いたします。

今後の展望

今回の派遣で、終始つきまとって離れなかったのが「ああ、英語がちゃんと話せたらなあ！！」という思いです。飛行機を逃した時、授業中、ごはんに行ったとき……何度そう思ったかわかりません。

英語を話す機会はたくさんありました。自分から機会を見つけてつくることもありました。

しかし、いくら話す機会があっても、肝心の英語が使えなくては意味がありません。

特に悔しかったのは、ラトビア大学の生物学部長にお会いしたときと、鳥類観測所に連れて行っていただいたとき、その観測所で鳥類の研究者に会ったときでした。

どの場面でも、頭のなかには訊きたいこと、伝えたいことがたくさんあるのに、うまく言葉に表せない。

今しか訊けないのに、そのチャンスを活かせない。歯がゆくて仕方ありませんでした。鳥類観測所まで片道4時間も運転していただいて、「またおいで」と言っていただけて、感謝でいっぱいなのに、十分にその気持ちを伝えられなかったことは、悔しいというより自分の英語力にがっかりし、苦しかったです。

なので、今は半年後にもう一度ラトビアに行くことを目標に、英語の学習に本気で取り組んでいます。

今まで中学・高校と学ぶ機会があったのに自分のものにできませんでしたが、これからは違おうと思います。今回の派遣が、人との出会いが、私の意識を変えました。

大切なのは、自分の意思で動くことなのだと実感できました。

「いろいろな人と話したい」「考えを伝えたい」今回感じた思いを糧に、これからがんばりたいと思います。



